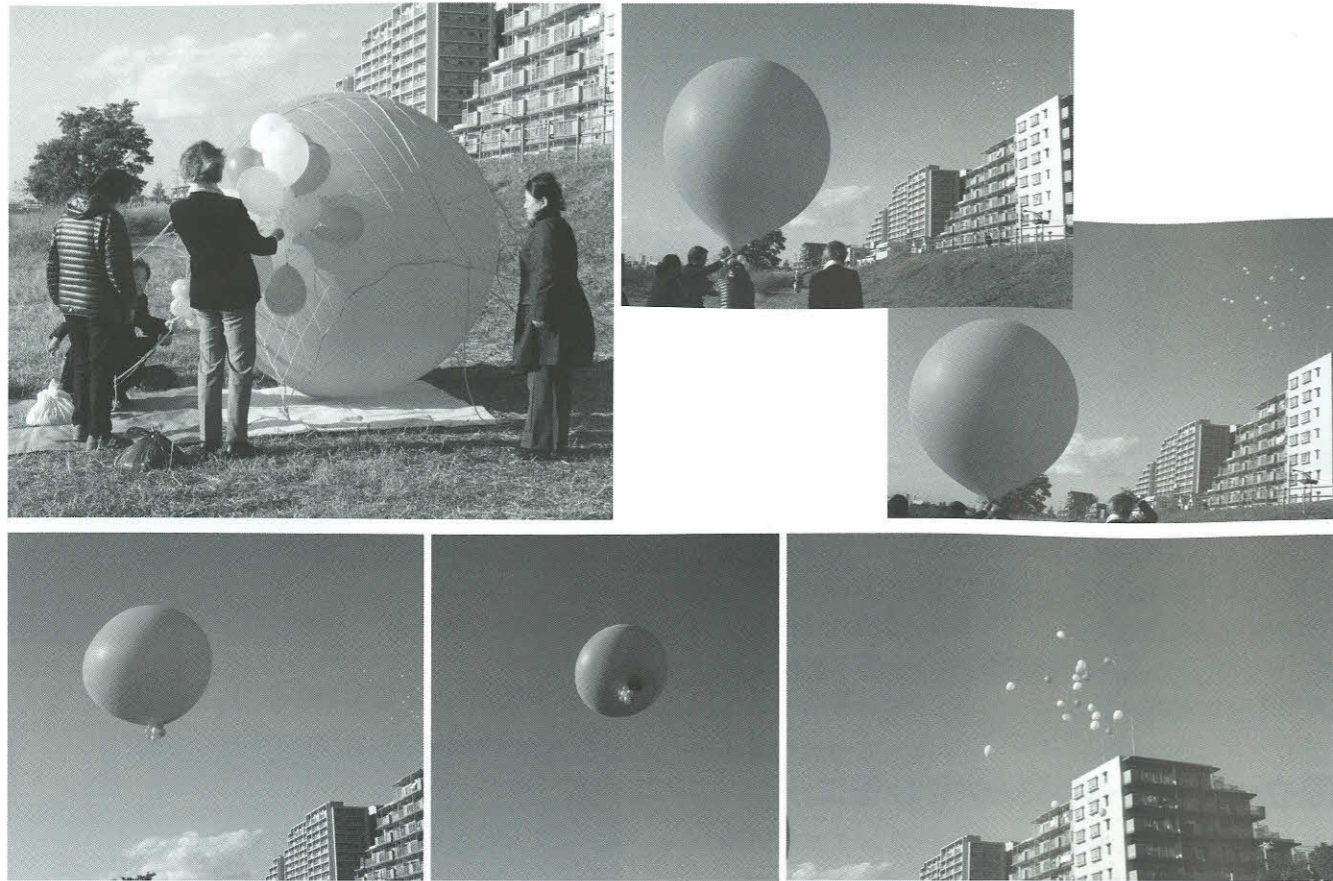


バルーン宇宙葬を準備する関係者



るわけです」

林代表はカウンセリングに興味があって、起業前に研修大学の講義課程を積極的に受講した。この時に傾聴の大切さを知り葬送に活かすようになった。さらに手話なども中級コースを修了している。このような活動から点字をするネットワークにも交流ができ、これら経験がオープニングセレモニーのデモンストレーションとなった。

## 生前葬そして家族信託

5月に生前葬をテーマにしたテレビドラマ「お葬式で会いましょう」(NHK)が放送された。また、1970年代から銀行員の傍らシンガーソングライターとして活躍し、さまざまな名曲を生み出してきた小椋桂が自身の葬儀を生きているうちにコンサートとして済ませたいと9月に4日間にわたって「生前葬コンサート」を開き話題になった。この生前葬は有名人が行っていることから一般には知られているが、実際に葬儀社を介して開くという事はあまりない

ようだ。15年ほど前に自身で生前葬を行った林代表は、営業ツールの一つとして使えるとみている。

「生前葬はこれまで5、6件の問い合わせがありました。実施したことはありません。それとは別に情報を知りたいということでマスコミの方の問い合わせもあります。この生前葬というのは密葬と本葬が逆転したようなものだと考えています。元気なうちに本葬をして、亡くなったときに火葬のみのような形を想定しているからです。そういった意味では、老人ホームなど施設への提案のツールになると考えています。施設では月ごとに誕生会などをやっていますから、そんなイメージでお元気なうちに生前葬をしてもらうという提案が、今後の生前葬を考える上での方向性の指針になるかもしれません。ボランティア的にノウハウを教えるということでも、その施設との関係性を構築していくことができるのではないのでしょうか」

一方で、最近注目されているものに「家族信託」がある。一般社団法人信託協会によると、2、3年前から信託商品としてリリースされたもので、信託会社や銀行などによって呼び方はさまざまあるよう

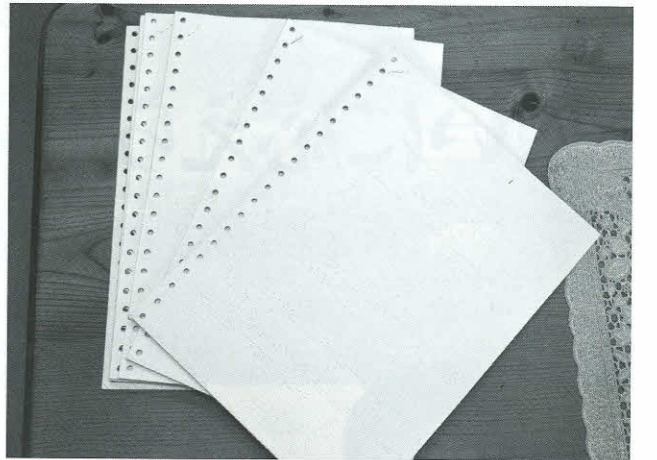
だ。これを取り扱う銀行では、家族信託というのは運用を目的にした信託商品でないため、その部分の費用がかからないことから手数料などが安価に済むというメリットがあると話していた。林代表もこの家族信託に注目している。「独居高齢者のおひとりさまの場合は成年後見制度を利用しますが、家族がいる場合は家族信託が今後伸びていくと考えています。さまざまなメリットがあります」と指摘する。

とくに不動産などの相続には家族信託が有用だという。土地を所有している親が認知症などになった場合、その子どもが成年後見人になっても不動産の組み換えや借入などはできなくなってしまう。つまり本人確認が必要になるからだ。この場合は家族信託契約を取り交わして親が委託者権受益者、子が受託者となると回避できる。また家族間の信託でもしもの時に必要になった資金を受け取る契約などもでき、これを葬儀費用としても利用できる。さらに年金のような形で毎月受け取る契約などもでき、委託者と受託者の間で中身をフレキシブルに対応できるというメリットがある。

## 動き出したバルーン宇宙葬

新しい散骨のスタイルがバルーン宇宙葬だ。同社ではオフィスの目の前にある多摩川河川敷でこれまで2度このバルーン宇宙葬実施している。開発したのは40年以上バルーン事業を展開してきた栃木県宇都宮市のバルーン工房(バルーン宇宙葬の会)でそこが本部となっており、同社は東京支部という位置づけだ。

葬送する場所のスペースは最低10m四方の空き地が必要で、さらに角度45度の上空付近に高層ビルや電線など障害物が無いことが条件となっている。バルーンにまず遺灰を入れてから、ヘリウムガスか水素ガスを注入する。そうすると大きさ直径2m~2.5mに膨らむ。そして上空の状況などを説明した後に1分間の黙祷を行い、遺族が最後の挨拶をするという流れだ。参加者は全員小さなバルーンを持って合図とともに一斉に大空に葬送する。巨大バルーンは2時間ほど時間をかけてゆっくりと高度30~35kmの成層圏付近に到達する。そして気圧



点字で書かれた式次第

の関係で3~4倍に膨張し、一瞬のうちに宇宙に散骨されるという仕組み。

なおこのバルーンの原料は天然ゴムを使用しているため日光や水によって分解されることから、環境に影響を及ぼすことはない。

実施した家族について林代表は「故人とご家族のお墓に入りたくないという希望がありました。これまで家族2人で見送った方と、お孫さんなど10数人で見送ったご家族もいます。涙を流さずずっとバルーンの軌跡を追っていました。解放されていく故人の姿をバルーンに重ね合わせているのだと思います。ですからご遺族にとっては空を見上げたときにおじいちゃんやおばあちゃんがいて、ずっと見守っていてくれるという気持ちになれるのではないでしょうか」

同社では仕事をするうえで大事にしているのは、「亡くなった人たちが常に私たちをスキャンしているという意識を持つべきです。たとえば空から見ているというように。そう考えると自然に立つ姿勢も変わってきて、全身全霊でご葬家にかかわることができます。そういう送りのべの意識を常にもって仕事にあたっている」と林代表は強調する。

2010年は同社にとって変革の年でもあった。株式会社法人化し、この年には最愛の夫を7カ月の闘病生活の後に亡くしている。もともとは建築設計士だったが、専務として同社を手伝うようになった。「いろいろな面で私をサポートしてくれ、そして人生を生き抜きました。私は主人を始め、葬送にかかわった故人やご遺族の方たちに日々励まされ業務を遂行してきました。これからは人生を卒業される方々のお役に立ちたいと思っています」